第１回射水市部活動の地域展開及び地域クラブ活動推進協議会　議事録

１　会　議

期　日：令和８年１０月２６日（月）１６：００～１７：３０

場　所：射水市役所会議室４０１

出席者：

（委　員）金谷会長（教育長)、六渡副会長、廉委員、牧野委員、網委員
金委員、中澤委員、漁委員、原委員、宮原委員、宮本委員
馬場委員、西村委員

（事務局）作道教育委員会事務局長
竹内事務局次長兼生涯学習・スポーツ課長
小谷内事務局次長
佐藤学校教育課長
川渕課長補佐、中林副主幹（学校教育課）
金三津課長補佐、明神係長、吉住係長、青木主任、佐々木主任
(生涯学習・スポーツ課)

２　概　要

・開会の挨拶（金谷教育長）

・議事進行（金谷会長）

・報告事項

（１）令和８年度までの実施状況について

（２）令和９年度からの運営体制について

・協議事項

（１）今後のスケジュールについて

・平日の地域展開に向けた中学校との連携について

【委員からの意見】

（委員）

バスケットボールの地域クラブに関しては、富山県バスケットボール協会と国が認定し、日本バスケットボール協会でも「中学校」の区分に入っており、今年度も高岡地区の大会に出場した。部活を廃部することによる影響として、中体連大会への参加が今後どうなるのかも重要な視点であるため、検討が必要だ。

（委員）

全国中学校体育大会については、代替大会ができたところから順次廃止される流れがある。今後部活動が廃止されることによって、中体連という組織自体についても議論されるのではないか。部活動が廃止され、顧問がいなくなると、中体連の大会運営が課題となる。

（委員）

大会に出場せずに楽しくその種目に触れるクラブや、中体連の大会を目指すクラブ、クラブチームの大会を目指すクラブなど、多様な選択肢ができて初めて生徒は選択できる。ただ現実としては、４月に日本バスケットボール協会に登録するため、それまでに方向性を決める必要がある。生徒・保護者にクラブや部活動について説明する際、クラブの方針が周知されないまま入部してから廃部等と方針が変わると、目指すところが途中で変わってしまうため、しっかり検討すべきだ。

（事務局）

平日の地域展開を進めたいと考えるクラブには、どの時点までに事務局へ申し出てもらうかという期限を決めたいと考えている。その上で、新入生説明会や在校生に対して周知する流れを想定している。中学校登録（中体連系）かクラブチーム登録（クラブ系）かの違いなど、中学生になってから全てスタートするのではなく、小学校のうちから地域クラブに入れる体制を作ることも、地域展開による新たな価値だと思う。そうした点も併せて協議しながら、子どもたちがスポーツ等から離れない体制を皆さんと協力して作り上げられればと考えている。

（委員）

「２年生になってからこの大会に出られない」「１年生で終わり」とい

った事を保護者や生徒にしっかり伝えておかなければならないのは、地域展開が進んだ後の話ではなく、まさに「今の過渡期」が一番大事だと思う。そこにもう少し目を向けて、ご対応いただきたい。

（委員）

保護者の方は全く理解できていないように思う。「自分たちの時代や上の子の時代とは違う」ことは分かっても、「何をどうしたらいいのか全くわからない」状態である。入学後に部活動紹介などを経て入部するかどうかを決める際も、保護者は子どもの話を聞いて事後報告的に受け止めるしかなく、不安の中で過ごしている。部活動が令和１３年度に廃止されるということも、まだ知らない方がいる。保護者の不安を少しでも取り除くために小学校高学年の子どもや保護者に事前に説明できる機会をぜひ設けてもらいたい。

（委員）

スポーツに対するニーズは大きく３つに分かれる。１つ目は身体を動かしたい、学校の仲間と放課後活動したいという「エンジョイ志向」。２つ目は競技を学び楽しみたい「競技志向」。３つ目は大会で上位や勝利を目指したい「チャンピオンスポーツ志向」がある。「部活動を廃止すると中学生の居場所がなくなる」という課題に対しては、「放課後クラブ」のようなものを学校内に立ち上げてみてはどうかと考える。これなら部活動自体を廃止でき、学校内に仲間と過ごせる居場所も残る。本気で上を目指したい子は外部のクラブチームに行き、学校で仲間と運動や文化活動を楽しみたい子は「放課後クラブ」に参加するという選択肢だ。総合型地域スポーツクラブは、そうした場への指導者派遣やコンテンツ提供など、協力ができると考えている。

（委員）

学校が保護者へ説明しづらいことや準備期間が短いという気持ちも分かるが、部活動廃止をもう少し長くという曖昧な状態がどこまで続くのかも気になる。どこかで期日を定めて動かないと時間だけが過ぎ、現状が続く恐れがある。１年が駄目なら２年にするなど、ゴールに向けて明確な期限を設定して話し合うべきである。また、学校に残って過ごしたい子どもたちへの「放課後クラブ」や、小学生の学童保育のような見守りについても、私どもにはノウハウがあるので、ぜひ協力していきたい。

（委員）

部活動地域展開の課題は複雑で生徒や保護者が心配に思っていることは分かる。もう少しスピード感を緩めたり、丁寧に進めていくことを考えてほしい。

（委員）

コロナ禍以降、少子化の影響もありスポーツ少年団の団員が減少し、昔は各小学校にあったチームがどんどん合併に追い込まれている。また、子どもたちが少し内にこもりがちになっている印象も受ける。スポーツ少年団は中学校で部活動に入るために５・６年から入団する子どももいるが、最近は少なくなっている。部活動の廃止はスポーツ少年団の活動ともつながっている。かつては中学校に入れば「どの部活に入るか」の選択肢があり、ほぼ全員が運動部や文化部に入部していた。しかし部活動が廃止され、各自が地域クラブを探して入る形になると、スポーツや芸術活動に関わる生徒自体が減ってしまうのではないかと考え、心配である。中学校入学時に「こういうクラブがたくさんあるから、ここから選んで参加してください」とスムーズに誘導できるような受け入れ態勢や情報展開を考えてほしい。

(委員)

「令和１０年度から地域クラブの認定開始」とあるが、どのような条件をクリアすれば認定されるのかという基準を早めに示してもらいたい。せっかくクラブを立ち上げても、制度開始時に認定から外れてしまっては混乱する。また、現状、休日の部活動指導者について特別な資格要件が定められていない場合があり、大変危惧している。スポーツ少年団では日本スポーツ協会の資格取得を義務付けている。地域展開にあたっても、指導者に最低限の資格を取得させるべきであり、それを認定要件に加える必要があると考える。

（委員）

小学校の立場から聞いていて、一番感じるのは「保護者の不安」だ。小学校では、４月の PTA 総会や保護者会などで、部活動や地域クラブの今後のスケジュールについて、情報を流せる場があるとありがたい。早めに情報を提供してもらえると、小学校としても保護者も子どもへアドバイスしやすくなる。

（金谷会長）

部活動展開について周知不足という意見や、子どもたちが選ぶ選択肢が整備されていないのではという意見をいただいた。事務局も地域展開を円滑に進めていきたいと考えているので、もう一度委員の皆様から意見をいただける機会を設けたいと考えている。２月の中学校入学説明会前までに、今日いただいた意見を事務局で検討し、１２月もしくは１月ぐらいに協議会を開かせていただきたい。

（委員）

本日出ていない視点として、「教員の思い」がある。部活動に積極的な先生もいれば、負担に感じている先生もいる。全国的に教員志願者の減少が課題となる中、持続可能な学校現場をどう維持するかという背景もある。自治体の取り組みとして見ると、射水市が現在描いている展望・スケジュールは、全国的に見ても極めて丁寧であり、数字や期限の根拠に基づき計画的に進められていると感じる。

行政や地域が受け皿（地域クラブ）を用意したからといって、子どもや保護者が必ずそこを選んでくれるとは限らない。より高いレベルを求める子は市外のクラブチームへ流れることもある。一方で、「これまで部活があったから気軽にスポーツを始めていた層」の行き場がなくなることが懸念される。これまでは、既存の部活動を代替することが課題だったが、これからは、小中学生が気軽にスポーツ・文化を楽しめる場が地域クラブに求められる。ただし、これを全て教育委員会が担い、整えてからスタートを切ろうと考えると、何も動けなくなってしまう。既存の活動を代替する準備をすることと、子どもたちのために何ができるのかってことを切り分けて考えないといけない。

石川県かほく市などでも、行政主導での地域クラブ化を進めつつ、民間や地域スポーツ団体を集めて「地域スポーツ全体の再デザイン」を話し合う場を設けている。また、「中学生本人から意見を聞く会」を実施したところ、「厳しくやるより楽しくスポーツがしたい」「放課後に友達と学校で過ごしたい」といった子どもたちの本音が見えてきた。大人が考えることと子どものニーズのギャップを丁寧に見ていく必要がある。また、総合型地域スポーツクラブが運営・管理を担う意義は非常に大きい。クラブ運営のノウハウのある総合型地域スポーツクラブが関わることで持続可能な仕組みになる。全国的にも、部活動の地域展開に伴い、小・中・高校生、さ

らには高齢者まで多世代が地域クラブで活動するケースが増えている。学校部活動の地域展開は単なる部活の置き換えではなく、「地域スポーツ・文化全体の活性化のスタート」と捉えることが重要だ。

さらに、文化の面について、全国的に文化協会の活動を多世代化していこうという取り組みも進んでいる。文化協会から指導者を中学校の部活に派遣するではなくて、希望する中学生が高齢化やメンバーの固定化が課題となっている文化協会の活動に参加をすることで、多世代化を図っていく事例もある。解決すべき問題点は多くあるが１つずつ解決していくことが、必ず地域の発展や子どもたちや地域の選択肢を増やすことにつながっていく。